

英語の名詞に先行する修飾語
——形態論と統語論の接点——

林 龍次郎

Prenominal Modifiers in English: The Morphology-Syntax Interface ---

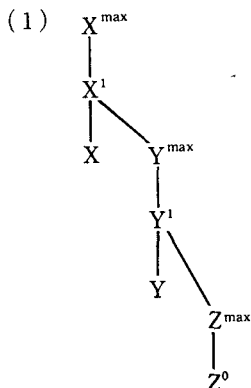
This paper explores the syntactic status of prenominal modifiers in English. Assuming the Single-Head Hypothesis of phrase structure, I construct a system in which a lexical category, not a phrasal category, is adjoined both to the N' and N level in the NP structure. Then I examine the relationship between morphology and syntax in the formal theory of grammar. I argue for the postulation of Morphological Structure, which can be seen as the morphology-syntax interface.

0. はじめに

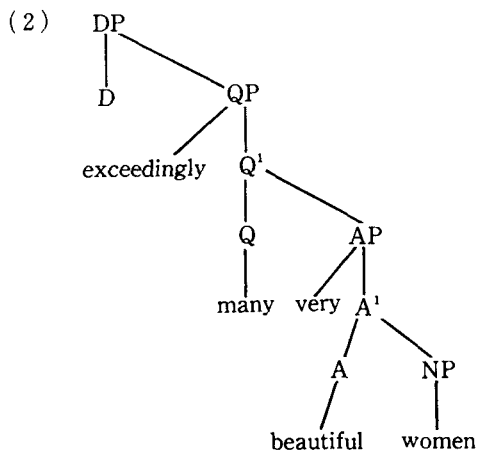
本論では、英語における prenominal modifier (名詞に先行する修飾語) の統語的地位を考察する。第1節では句構造の理論における多主要部仮説と単一主要部仮説を比較し、後者が妥当であるという立場に立つ。第2節では、Sadler and Arnold (1994) の「弱語彙的構造」という概念を考察し、これを部分的に受け入れながら、名詞に先行する修飾語について新しい提案をする。第3節では、その提案を受けて、形態論と統語論の関係について考える。第4節で結論を提示する。

1. 単一主要部仮説

Chomsky (1986) 以降、従来の S という範疇は機能範疇 I (屈折) の最大投射であり、S' は C (補文標識) の最大投射として捉えられるようになった。Abney (1987) は、従来 NP の指定部とされた D (決定詞) という範疇も主要部であると考え、DP 分析と呼ばれるものを展開し、多くの生成文法学者は現在これを受け入れている。このように GB 理論以前には主要部と考えられていなかった要素を主要部として捉える分析が多くなり、これを Payne (1993) の言葉を借りて多主要部仮説と呼ぶことにする。この仮説のもとではすべての主要部が最大投射を作るので、一般的な XP の式型は(1)のようになる。



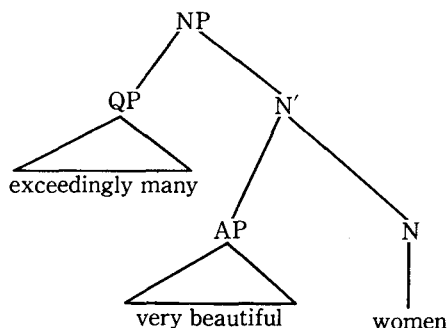
そしていわゆる名詞句は(2)のような句構造をもつことになる (Abney 1987, pp. 338-9)。



すなわちDは補部としてQPを選択し、QはAPを選択し、AはNPを選択する。このような分析の典型はAbneyのほかRadford (1993) にも見られる。

一方Payneは、名詞句の主要部はNのみであり、D、Q (数量詞)、A (形容詞) などはすべて主要部Nの修飾語であるとして単一主要部仮説を提案する。この仮説を採ると、(2)は次の構造になる。

(3)



Payne は動詞の下位範疇化など5つの根拠を挙げて単一主要部仮説が多主要部仮説に優っていると論じている。ここでは詳述しないが、Payne の主張するとおり、動詞が決定詞・数量詞・形容詞を下位範疇化することはなく、あくまで名詞を選択することから、単一主要部仮説が妥当であると考えてよいと思われる。

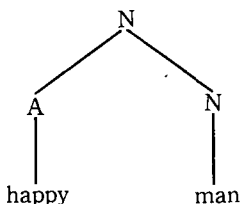
次節では、単一主要部仮説が妥当であるという立場に立ち、名詞句においてNという主要部の前に生じる修飾語の統語的地位について考察する。そして(3)とも異なる構造の可能性を考えていく。

2. 名詞先行修飾語と「弱語彙的構造」

2.1 Sadler and Arnold (1994)

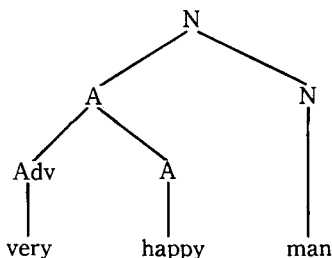
従来、単一主要部仮説においても、名詞に先行する形容詞は(3)の beautiful のように AP を成していると見る分析が普通であった。しかしこれが AP でなく語彙範疇 A がいわば裸の形で N の修飾語として現れるとする分析がある。Sadler and Arnold (1994) は、happy man のような連鎖を句とは見ずに、次頁の図のような弱語彙的構造（または小構造）を成していると考ええる。

(4)



Sadler and Arnold (以後 SA) の分析では、主要部である名詞の前に起る修飾語は句を成しておらず、語の付加であるとされる。very happy man の場合でも very happy は AP でなく次のようになる。

(5)



修飾語が形容詞句を成していると考えるならば次の非文法性が説明できなければならない。

- (6) a. *a fond of children person
 b. *a polite in manner person
 c. *a more intelligent than Sam person

従来こうした事実はいわゆる Head-final Filter で説明されてきた。しかしこれらの例は、名詞先行形容詞が AP を成さず語彙範疇 A であり、それが主要部 N に左から付加するものと考えればフィルターを使わずとも自然に排除できる¹⁾。そこで基本的にはこの分析を採用することとするが、弱語彙的構造(4)を仮定する SA の分析が全面的に妥当かどうかは以下で考えていく。

SA は、いずれも A-N の連鎖である(7)と(8)を比較して、両者の間には、等位接続の可能性や one での代用その他に関して(9)と(10)の相違

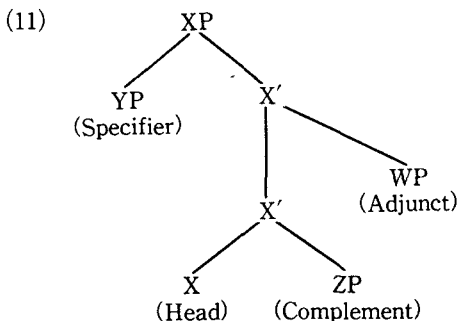
が見られるとする²⁾。

- (7) a. solar heat
- b. nuclear physicist
- (8) a. unpleasant heat
- b. talented physicist
- (9) a. *solar and lunar heat
- b. ? I have seen a lunar eclipse, but never a solar one.
- c. *The lunar rays are less harmful than the solar (ones) .
- d. *It detects something solar (=heat) .
- e. *very solar heat
- (10) a. dry and unpleasant heat
- b. I have witnessed a dramatic eclipse, but never an unpleasant one.
- c. The pleasant rays are actually less dangerous than the unpleasant (ones) .
- d. It detects something unpleasant (=heat) .
- e. very unpleasant heat

このような相違から SA は、(7)は「強語彙的構造」すなわち単語(複合語)であり、(8)は単語ではないが句でもない「弱語彙的構造」であるとする。しかし、いずれにも(4)のような構造を仮定している。

彼らの挙げる(9)(10)の事実は注目に値するもので、いかなる文法もこれを説明できなければならない。しかし、SA は、(7)と(8)の句構造上の違いは明らかにしていない。本稿ではこの2種類のA-N連鎖の構造上の相違、すなわちAの付加位置の相違を重要と考える。そして、Xバー理論の枠の中で、名詞先行修飾語の構造的な位置を捉えることを試みる。

標準的なXバー理論では次の構造が仮定される。



以下では、(11)における補部 (Complement) と付加部 (Adjunct) の区別が名詞先行修飾語にも存在するという主張を行っていく。

2.2 名詞を修飾する名詞

形容詞について考える前に、名詞が他の名詞に先行して修飾語となる場合を考察してみよう。

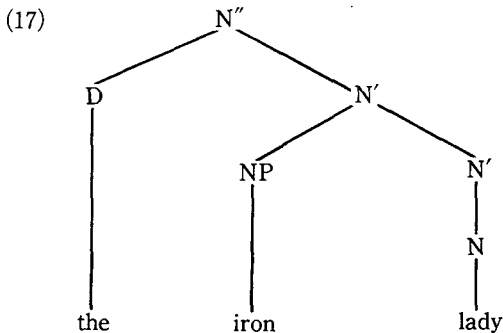
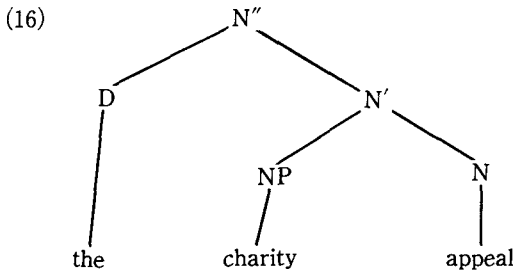
- (12) a. *brain* damage
 b. the *charity* appeal
 c. the *fraud* investigations
 d. the *pornography* ban
 e. a *Debbie Harry* fan

- (13) a. the *corner* shop
 b. the *iron* lady
 c. the *river* bridge
 d. *China* tea
 e. the *winter* weather

(12) (13) の例はいずれも Radford (1988, pp. 204-5) からである。Radford は、(12) のそれぞれの例が(14)に対応し、(13)が(15)に対応することから、(12)の斜体部は主要部の名詞に対して補部であり、(13)の斜体部は付加部に相当すると述べている。

- (14) a. damage to the brain
 b. the appeal for charity
 c. the investigations into fraud
 d. the ban on pornography
 e. a fan of Debbie Harry
- (15) a. the shop on the corner
 b. the lady of iron
 c. the bridge over the river
 d. tea from China
 e. the weather in winter

従って(12) (13)は次の構造をもつことになる。



上の構造を仮定することにより，次の事実が説明できると Radford は述べる。

- (18) a. a Cambridge physics student
b. *a physics Cambridge student
- (19) a. Which physics student? The Cambridge one?
b. Which Cambridge physics student? This one?
c. Which student? *The Cambridge physics one?
- (20) a. several physics and chemistry students
b. several Oxford and Cambridge students
c. *several physics and Cambridge students
d. *several Cambridge and physics students

上の事実から、physics は名詞 student の補部で、Cambridge は付加部であり、a physics student は (16)、a Cambridge student は (17) の構造をもつと Radford は論じる。

しかし上のデータは、(16) (17) の構造を設定しなければ説明できないというものではない。(18) - (20) の事実は、Cambridge と physics とは対等の関係ではなく、後者のほうが主要部に近い位置に生じるということを示すものであるが、それならば (16) (17) とは別の構造の可能性もある。

Radford に従うと、ここで対象になっている N-N 連鎖はすべて N' であり、下のような可能性は考慮されていない。

- (21) $[N \quad [N] \quad [N] \quad]$

しかし、(12) (13) のような例の中には、複合語、つまり (21) の構造を持つと一般に考えられているものが多い。

複合語を句から区別する基準として、絶対的なものではないが、次の三点があると考えられている (並木 1985, p. 78 を修正)。

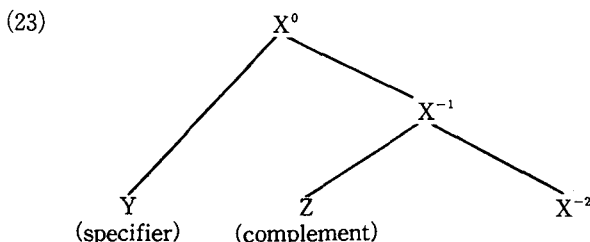
- (22) ①第 1 要素と第 2 要素の間に他の要素を挿入できない (形態的基準)
②左の要素に第 1 強勢、右の要素に第 2 強勢が付与される (音韻的基準)
③全体の意味が各部分の意味から予測できない (意味的基準)

上の要因のうち一つ以上を満たしていれば句ではなく複合語とみなしてよいとすると、(12) (13)の例はいずれも①②の二つを満たしていると考えられるので、複合語の資格を持っている。③に関しても、(13b)を例にとると、これは必ずしも意味が一つに決まるわけではない。「鉄のように意志の固い女性」のほか、「身体が鉄のような女性」、「鉄を鋳る仕事をしている女性」、「鉄を売っている女性」などの意味が語用論的条件によっては可能になるのである。従って、全体の意味が常に部分の意味から予測できるのではないから、複合語の基準を満たしていることになる。

上のことから、(12) (13)のように、Radfordによれば(16) (17)の構造となる連鎖も、(21)の複合語型構造とみなしたほうがよいと思われる。では、(18)-(20)に見られる補部と付加部の相違はどう捉えたらよいだろうか。次節では、(12) (13)の N-N 連鎖をいずれも単語（複合語）と分析し、かつ補部と付加部の区別を表現できる構造を考える。

2.3 Cinque (1993)

Cinque (1993) は、下のような構造を複合語について提案している。



前節(12)の斜体部は上図のZの位置に起こり、(13)の斜体部はYの位置に生じると考えると、二つの場合の違いが適切に捉えられる。Cinqueの例でいうと、前者に相当するのが(24)、後者に相当するのが(25)である。

- (24) a. cave exploration
b. star observation

- c. officer election
 - (25) a. student rebellion
 - b. government funding
 - c. consumer spending
 - d. enemy movements
 - e. state hiring
- ((24)-(25), Cinque (1993, p. 291))

これらについて(22)の②に適合するか否かを考えてみよう。これらのN-N連鎖の第1強勢は、Cinqueによると、(24)では左側の要素に置かれ、(25)では右側の要素に置かれるという。これに従うと、(24)は複合語の条件(22)の②を満たし、(25)はそれを満たさないということになる。

しかし実際には、(25)と同様に左の名詞が右の名詞に対する補部でない場合でも第1強勢が左に置かれるものは多数存在する。

- (26) a. city hall
- b. flower bed
- c. bullet train
- d. language laboratory
- e. safety belt

また、Cinqueも注で、Lieberman and Sproat (1992)を引用して次のように述べている。apple cakeとMadison Streetは、左側の要素に第1強勢があり、apple pieとMadison Avenueは右側の要素に第1強勢がある。これらは語彙化(単一のNとして再分析されること)が起こっているかどうかの違いであり、前者は語彙化された例で、後者は語彙化されていない例である。ある連鎖が語彙化されているか否かは個人差があって、apple pieを前者の型で発音する話者もあり、cream sauce, chocolate cake, potato salad, peanut butter等も話者により両方の強勢型がある。これは語彙化という現象を考えると自然なことである。

(22)の①の基準についても、(13)(24)(26)はいずれも満たしていると言える。③の基準については、先にiron womanについて見たように、語用

論的にはいくつもの意味が可能になり、必ずしも予測可能ではないので満たしている。

上のことから、N-N 連鎖において左側の要素は、補部でない場合でも N' の娘ではなく、(23)のように全体で語彙範疇 N を成すと考えたほうがよい。そのうちで語彙化の進行したものは②の基準をも満たすものと考えられる。

次の節では形容詞が名詞先行修飾語となる場合について同様の考察をする。

2.4 名詞に先行する形容詞

次の(27) (= (7)) のような例は、形容詞と名詞の間に他の要素を挿入できないという点で(22)①の基準にかなっている。

- (27) a. solar heat
b. nuclear physicist

同様の例に次のものがある。

- (28) a. small talk
b. cold cream
c. careless mistake
d. white lie
e. natural science
f. stellar observation
g. presidential election
h. political party
i. occasional visitor
j. linguistic meeting

これらは(22)②の基準は満たしていない。しかし、次の例は左側の要素すなわち形容詞に第1強勢があり、②も満たしている。

- (29) a. tidal wave

- b. blue plate
- c. hot cake
- d. polar bear
- e. White House

また、(28)のうちいくつかと(29)のすべては(22)③を満たしている。従って(29)は三条件をいずれも満たしており、語彙化した複合語と言えるだろう。

(27)(28)(29)のすべてに共通する点としては、形容詞に比較変化が起こらず、very等の程度の副詞も伴わないということがある。

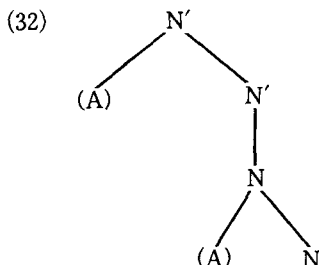
もう一つ、(27)(28)(29)に共通の重要な点は、関係代名詞を用いた言い換えが不可能だということである。すなわちその形容詞に叙述的用法がないか、あっても意味が異なるものである。

- (30) a. *heat which is solar
- b. *physicist who is nuclear
- (31) a. *talk which is small
- b. cold cream ≠ cream which is cold
- c. *mistake which is careless
- d. *lie which is white
- e. natural science ≠ science which is natural
- f. *observation which is stellar
- g. *election which is presidential
- h. political party ≠ party which is political
- i. *visitor who is occasional
- j. ? meeting which is linguistic

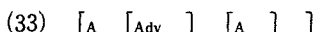
上のような例に対して、happy man や interesting book 等の一般的なA-N連鎖は、(22)①②③のいずれも満たさず、関係代名詞を用いた言い換えが可能である。

そこで、(27)-(29)の例における形容詞は(23)のYの位置に起こり、

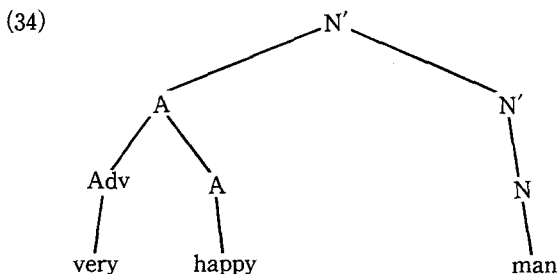
happy man の happy 等は N' レベルで付加するものと仮定する。下の構造になる。



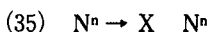
N' に付加される形容詞は、多くの場合程度の副詞 very, quite 等と共に生じることが、形容詞の前にこれらの副詞が生じた場合は、SA がそうしているように (33) の構造を考え、AP は構成しないと仮定する。



従って very happy man に次の構造が付与される。



本節では語彙範疇の付加に関して次の一般的な規則が存在すると主張していることになる。



この規則は繰り返して適用できるので、いくつもの形容詞が一つの名詞主要部を修飾することを許す。

ここで、形容詞の種類による生起位置の違いを考えてみよう。

次の例は、関係代名詞節による言い換えの不可能な形容詞を示したもの

である。

- (36) a. the main reason
 a'. *the reason which is main
 b. a total stranger
 b'. *a stranger who is total
 c. sheer madness
 c'. *madness which is sheer
 d. utter folly
 d'. *folly which is utter
 e. the former president
 e'. *the president who is former
 f. a rural policeman
 f'. *a policeman who is rural

(36a-f) は, (22) の基準の①にはかなっており, (13) (27) (28) と同じく形容詞は (23) の指定部の位置に生じると考えられる。その場合補部の位置は空である。ところで次の例は可能である。

- (37) a. the main political party
 b. the former nuclear physicist

つまり (28) の各例に先行して (36) の形容詞が生じることもありうる。従って, (23) で指定部 (specifier) とした位置は繰り返して生じることが可能であり, 今後は指定部/修飾部 (specifier/modifier) とする。

一方, N' に付加される形容詞, すなわち関係詞節での言い換えが可能なのはどうか。これは, 繰り返して現れる例が頻繁に観察される³⁾。

- (38) a. a funny red hat
 b. a dark thin face
 c. the important long French novel
 d. an ugly big round chipped old blue German vase

(35) の規則からは N レベルでも N' レベルでも無限に付加を繰り返すう

ることが予測される。実際、N'に付加する形容詞は、意味的に許されるかぎり無限に付加できると言えるだろう。しかしNに付加する形容詞は、実際には(37)のような2個までの繰り返ししか観察されない。これが統語的な制約か意味的な制約かはここでは探究せず、(35)が各レベルに働いているものと考えておく。

また、(35)においてXの範疇はN'レベル($n=1$ のとき)ではほとんどAであり、Nレベル($n=0$)では大体AかNに限られる。この点についても何らかの説明が必要であるがここでは立ち入らない。

2.5 Sadler and Arnold による分析と本論の分析

2.2節で述べたようにSAは、名詞主要部と、それに先行する修飾語がつくる構造を弱語彙的構造と分析している。本論では、N-Nの連鎖と、一部のA-N連鎖については基本的にこれを受け入れた。しかし、A-N連鎖のうちAを関係詞節で言い換えられるものはそれと異なり、AがN'に付加されるものとした。SAが彼らの分析により説明できるとしている事実の多くは、本論の分析でも説明可能である。例えば、次のような事実である。

①名詞先行形容詞は等位構造が可能である。

(39) a tall, stupid, and balding professor

語彙範疇同士の等位接続は可能なので、本論の分析でも問題はない。

②補部や付加部が名詞の前に起こることを正しく排除できる。

(40) a. *a fond of children person

b. *a polite in manner person

本論でも、付加されるのは語彙範疇であるから上の非文法性は当然の帰結である。従ってHead-final Filterは不要である。An *easy to pronounce* nameの斜体部のような例は、語彙部門で複合語として形成されると思われる。

③修飾語の順序に制限がある。

- (41) a. tall red neck
b. *red tall neck
c. big shoe shop
d. *shoe big shop

これについては、本論の分析のほうがより広いデータをカバーできる。
SA は例えば次の文法性の相違が説明できない。

- (42) a. tall rural policeman
b. *rural tall policeman

本論の分析によれば、rural がNに付加する形容詞であり、tall がN'に付加する形容詞であるということから、上の事実は当然の帰結となる。

一方、SA ではどう説明されるのか明らかでない事実が、本論の分析では説明できる。例えば one の分布及び名詞の削除に関する次のデータである。

- (43) a. ? I have seen a lunar eclipse, but never a solar one.
b. I have witnessed a dramatic eclipse, but never an unpleasant one.
c. *The lunar rays are less harmful than the solar (ones).
d. The pleasant rays are actually less dangerous than the unpleasant (ones).

SA は、上の a. と c. が強語彙的構造、b. と d. が弱語彙的構造であるとして区別はするが、いずれも樹形図上は(4)であり、上の対立が統語的にどう説明されるのかは明らかでない。本論の分析を採り、one 及びゼロ代用形がNではなくN'に取って代るものと考えれば、*the student of physics and the one of chemistry/the student with long hair and the one with short hair の対立と(43)の対立とが同様に説明できる。

ここで、次の a. と b. の意味の相違についてふれておこう。

- (44) a. navigable rivers
b. rivers navigable

(44a) の navigable は川の恒常的性質を表し、(44b) では一時的状態を表す。これを説明するため SA は次のように言う。(44a) は A-N の弱語彙的構造であり、(44b) は AP が名詞を後から修飾している。前者では航行できるという性質と川であるという性質とが一体になっているのに対し、後者では航行できるという性質が、川であることとは切り離された性質となる。従って上で示した意味の違いが生じる。

しかし、(44b) の navigable が AP を成しているという強力な証拠はあるだろうか。形容詞が名詞の後に置かれる例には他に下のようなものがある。

- (45) a. heir apparent
b. body politic
c. from time immemorial
d. the president elect
e. attorney general

これらの例で後置されている形容詞は、名詞と一体になって初めて意味を持ち、AP は成しておらずむしろ SA の言う弱語彙的構造にあたると考えられる。また、次の例では形容詞の前置・後置いずれも可能であり、意味に違いはない。

- (46) a. the best possible use = the best use possible
b. the only suitable actor = the only actor suitable
c. at the appointed time = at the time appointed
d. in past years = in years past
e. positive proof = proof positive

(Quirk et al. 1985, pp. 418-9)

以上のことは SA 説では説明できない。

本論では SA とは異なる次の提案をする。(44a) (44b) のいずれにおいても、navigable は N' に付加されている。前者では左、後者では右に付加されている。いずれの場合でも navigable は A であり、AP を成していない。

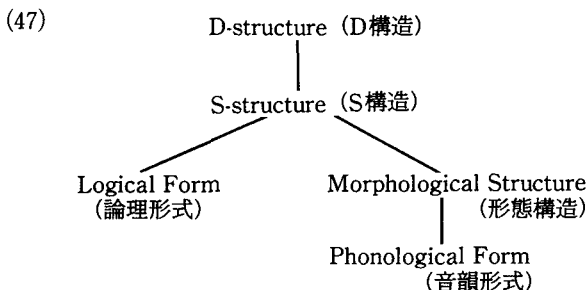
(35)で、Xが付加しうるのは左側とは限らず、右側に付加する場合も有標の選択肢として存在する⁴⁾。形容詞の意味に恒常的性質と一時的状態とがある場合、前者が無標で後者が有標である。構造が有標の場合には意味的にも有標となる。従って、(44a)と(44b)の間には上で示した意味の相違が生じる。Xが右側に付加することもあると考える別の理由は、N以外の範疇においてそう考えるべき場合があるからであるが、詳述は別の機会に譲る⁵⁾。

3. 形態論と統語論の関係

本論の提案は、名詞を修飾する語彙範疇がN及びN'の両レベルに付加されうるというものである。このうちNに付加される場合とは、複合語の形成に他ならない。従って、複合語形成のプロセスを統語的現象とみなしたことになる。

(22)に挙げた三つの基準をすべて満たし、その中でも特に結合の度合いが強い複合語は、語彙化されて辞書に登録される。blackboard, bluefish, birdbrain, paperback, manservant等の単語がその例である。一方、前節で見た例の多くは統語部門でのNへの付加によって形成される、語彙化されていない複合語である。本論では、SAの言う「弱語彙的構造」が存在するとすれば、これらの「語彙化されていない複合語」だけであると考えられる。つまりN'への付加であるhappy manやinteresting bookは弱語彙的構造から除かれる。

では、一般的に形態論の規則とされるものは本論ではどう位置付けられるのだろうか。Halle and Marantz (1993)は、配分形態論(Distributed Morphology)の概念のもとに、次の文法モデルを提唱する。



本論では、形態論は辞書 (Lexicon) と形態構造 (Morphological Structure) の二部門に配分されているという立場をとり、ほぼ(47)と同じモデルを仮定する。辞書においては、派生語の形成及び語彙化された複合語の形成がなされる。これに対し形態構造は一種の解釈部門である。付加による弱語彙的構造の形成は統語部門で行われ、形態構造では解釈上不適格なものが排除される。次の例を見よう。

- (48) a. a Cambridge physics student
b. *a physics Cambridge student

上の例は a. b. ともに統語部門では生成される。しかし、(23)の式型からすると、前者では physics が補部、Cambridge が指定部／修飾部なので「物理学専攻のケンブリッジ大学生」という妥当な解釈が得られるが、後者では「ケンブリッジ専攻の物理学大学生 (?)」という奇妙な解釈しか与えられないので、これは解釈部門である形態構造において排除されると考えられる。

他に、ここでは詳述しないが、動詞由来複合語 (deverbal compound) に関する原理、例えば Roeper and Siegel (1978) の第一姉妹原理 (First Sister Principle), Selkirk (1982) の第一階投射条件 (First Order Projection Condition) 等も形態構造において働くものであらうと思われる。すなわち、*quick-making や *tree eating of pasta のようなこれらの原理で排除される例も、統語的には生成されるが、形態構造で不適格とされるものと考えられる。

4. おわりに

本論では、名詞の前に置かれる修飾語の統語的地位を考えてきた。本論での名詞句の分析は、いわゆる DP 分析等とは違い、冠詞類や数量詞、限定的用法の形容詞などをすべて修飾語とみなす「単一主要部仮説」の上に立って展開したものである。名詞を修飾する形容詞・名詞は AP, NP という句をなしておらず、A, N という語彙範疇が直接に付加されることを見た。これは、Sadler and Arnold (1994) の提案を一部取り入れたのであるが、彼らとは異なり、N と N' のいずれのレベルでも付加が起これと考えた。そして、統語論と形態論の接点について考察を試み、一種の解釈部門である「形態構造」を設定することを支持した。

最後に、今後の課題についてふれておこう。一つは、修飾語の付加が N'' レベルで起こる場合である。冠詞類(限定詞)、数量詞、数詞がこれに相当すると考えられる。これらは形容詞とは異なり、複数生じる時の順序が固定されており、N や N' レベルの修飾語よりも「指定語 (specifier)」としての文法化 (grammaticalization) が進んでいると考えられる⁶⁾。もう一つは、本論で名詞句について観察したのと並行的な現象が動詞句など他の範疇に見られるかどうかということである。これについては、他の範疇つまり VP, AP, PP にも NP と同様の付加構造があるという見通しを筆者は持っているが、詳細は別の機会に述べることにしたい。

注

1) 次の例は問題となりうる。

(i) He has a similar though subtly different car. (Radford 1988, p. 212)

(i) に関しては、similar though subtly different が等位構造に準ずる形となっているため容認されるものと思われる。等位構造は(ii)のような形であるので、全体が主要部の左に付加されることはここでの提案と矛盾しない。

(ii) [A [A] Conj [A]]

2) (9) a. (10) a. の等位構造のデータについては、やや問題がある。(9) a. が容

- 認不可能なのは, solar であつ lunar な熱というものがありえないという意味的要因で排除されるもので, 形式上は許されるはずの等位構造である。
- 3) Quirk et al. (1985, p. 437, p. 1340) は, 複数の形容詞が連続して生起する場合の順序に規則性があることを述べている。本論で N に付加すると考える形容詞は, 彼らがもっとも名詞に近いゾーンに起こるとするもの以外に, もっとも名詞から離れたゾーンに生じるとするものも含んでいる。この矛盾は今後解決すべき問題である。
 - 4) これはパラメーター化されていて言語による差異があると考えられる。たとえばフランス語は英語とは反対である。
 - 5) 例えば, enough という副詞が形容詞の後に置かれるが, これは主要部の右に付加されて弱語彙的構造を成している。従って (i) が可能である。
(i) He has a similar enough car.
 - 6) これらの範疇と VP における助動詞的要素との関係については Hayashi (1995) を参照。

引用文献

- Abney, S. (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*. MIT dissertation.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger Press.
- Cinque, G. (1993) "A Null Theory of Phrase and Compound Stress," *Linguistic Inquiry* 24, 239-297.
- Halle, M. and A. Marantz (1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," Hale, K. and S. J. Keyser (eds.) *The View from Building 20*, 111-176. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hayashi, Ryujiro (1995) "Specifiers Across Categories," Baba, A. et al. (eds.) *A Festschrift for Professor Kinsuke Hasegawa*, 41-54. Tokyo: Kenkyuusha.
- Liberman, M. and R. Sproat (1992) "The Stress and Structure of Modified Noun Phrases in English," Sag, I. A. and A. Szabolcsi (eds.) *Lexical Matters*, 131-181. Center for the Study of Language and Information, Stanford University, Stanford, Calif.
- 竝木崇康 (1985) 『語形成』新英文法選書第 2 巻。東京: 大修館。
- Payne, J. (1993) "The Headedness of Noun Phrases: Slaying the Nominal Hydra," Corbett, G., N. Fraser, and S. McGlashan (eds.) *Heads in Grammatical Theory*, 114-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radford, A. (1988) *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, A. (1993) "Head-hunting: On the Trail of the Nominal Janus," Corbett, G., N. Fraser, and S. McGlashan (eds.) *Heads in Grammatical Theory*,

- 73-113. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roeper, Th. and M. Siegel (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds." *Linguistic Inquiry* 9, 199-260.
- Sadler, L. and D. Arnold (1994) "Prenominal Adjectives and the Phrasal/Lexical Distinction," *Journal of Linguistics* 30, 187-226.
- Selkirk, E. (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, MA: MIT Press.